

TENOHASI

てのはし／地球と隣のはっぴい空間池袋
会報誌第45号 2024年5月30日発行



〈TENOHASI 20周年のつどい特集〉

- P 3 20周年を振り返って 理事とアイドルの座談会
- P 8 当事者の座談会
- P 10 各セクションから 炊き出し 夜回り 医療相談
- P 18 課題とこれから
- P 20 財政状況報告
- P 22 当事者インタビュー
- P 24 TENOHASIがなぜか映画づく
- P 26 ご寄付ありがとうございました

TENOHASI 20周年のつどい 2024年1月20日 としま産業振興プラザ (IKE・Biz)

TENOHASI は 2003 年 12 月に結成され、昨年 12 月で 20 周年を迎えました。そこで TENOHASI のこれまで・今・これからを考える「TENOHASI 20 周年のつどい」を 1 月 20 日に行いました。

当日は会場・オンライン含めて約350人の参加がありました。ありがとうございました。
その中で明らかになったことがいくつかあります。

<支援を求める人の層が変化>

TENOHASI は路上生活者の支援を使命として結成されました。池袋の路上生活者は 20 年前の 5 分の 1 以下に減少し、全国的に見ても同じように減少しています。

しかし、コロナ禍になって炊き出しと生活相談に来られる方が急増しました。生活困窮者支援活動は新しい段階に入らなければならなくなりました。

<「アパートに入れたら上がり」ではなかった>

貧困ビジネスがおおきなビジネスを展開している中、私たちは家を失った方が「安心できる自分だけの住まい」を取り戻すことを目標にささやかな活動を展開してきました。

しかしアパート入居は人生の新たな困難の始まりでしかないことを、今、私たちは痛烈に思い知らされています。

<地域での孤立孤独と、さらなる放浪>

話し相手もない、誰も話を聞いてくれない、誰からも必要とされていない、役所や携帯電話会社から届く手紙をどうしたらいいかわからない、アパートのほかの住民とのトラブル、福祉事務所とのトラブル、適切な医療につなげられない、ギャンブルやアルコールの依存から抜け出せない、履歴書に書けない空白期間、追いかけてくる昔の借金、人のお世話になっているばかりで心苦しい、生活保護を受けていると人には言えない・・・

それまで積み重なってきた苦勞の先にやっとたどりついた地域生活で生じる苦難は、枚挙に暇がありません。アパートを捨てて再び放浪生活に入る方も。

いままでの TENOHASI の形は守りつつ、少しずつ変えて、新たな支援を模索する段階に入りました。

当日の映像は QR コード、または以下のリンクから

<https://youtu.be/2j4EKGJ8t7s?si=yIXt7hduOFYH7h-->



「20年の課題の変化・・・」 理事とアイドルの座談会

てのはしは昨年12月、結成20周年を迎えました。

「おめでとうございます」と言ってくださる方も多いのですが、それが「めでたい」かどうかは微妙なところですよ。おぎゃーと生まれた赤ちゃんが二十歳になったらそれは間違いなくめでたいことですが、私たちは「池袋で路上の人をゼロにして、めでたく解散」が目標であり使命ですので、本当なら「皆さんからご支援を頂いて20年もやってきたのに、まだ路上の人をゼロに出来ず、申し訳ございません」と謝罪会見をすべきところかもしれません。しかし、節目の年に過去を振り返って今後を考える機会を設けるのも大事だと思つてこの集いを企画しました。

最初に理事三人と路上のアイドル田屋さんの座談会でこの20年の歩みを6つの段階に分けて考えてみようと思います。

第一段階 獲得目標は生存

現代の「ホームレス問題」の始まりは、皆さんご存じの通り1990年代前半におきたバブル経済の崩壊です。バブル時代はマンションも家も建てれば必ず売れ、買えば必ず値上がりするからまた買うという狂乱の時代で、日雇い労働者は引く手あまたでした。しかしバブルがはじけると仕事は激減し、多くの労働者がホームレス化しました。隅田川河川敷には2000軒のテントがあったと言われ、池袋の首都高高架下にも50軒以上の段ボールハウスが出来ました。



その頃は今よりもさらに差別偏見が強く、池袋に支援団体はなく、豊島区では平均で一ヶ月に一人が路上死するというすさまじい状況でした（ちなみに新宿では一ヶ月に二人が亡くなっていたと聞いています）。襲撃事件が多発し、各地で死者が相次ぎました。

そんな中、路上生活の人たちが「誰も助けてくれないから、自分たちで『仲間』を助けよう」と、池袋で炊き出しを始めまし

た。そのころ古本や古雑誌を回収して生計を立てていた田屋さんが語ります。

「一時間くらい歩いて他の団体の炊き出しにいってももらえるのは冷たいおにぎりばかり。池袋であつたかい食事を出せないかなあとおもつて、1999年ごろに相談して自分たちで炊き出しを始めたんです」

てのはしが「熱々のごはん」にこだわつてきたのはここに理由があります。お弁当配布になつて難しくなりましたが。

理事の中で最古参である坂内さんは2001年に初めて公園の炊き出しを目撃したときの印象を「日本にはこういう人を助ける制度がないんだ、と思った」と語っています。後に日本に生活保護があることを知り、支援活動に参加したのですが、路上の人が利用するには高いハードルが存在することを知らずにいます。

第二段階 生活保護を「勝ち取る」

やがて、支援者や医療者の団体もできて、それらを統合する形でてのはしができました。その中心だった森川すいめいさん(当時は学生・現在は精神科医・てのはし理事)にその頃のことを聞きました。

「新宿で活動していたとき、路上の方で病気がある人は医者を紹介状を書いて病院にいけるようになるという活動をしていました。でも池袋に来たら医者も支援者もいなくて、田屋さんたち当事者が炊き出しをして、おなかすいたまま夜回りをしている。でも自分は帰る家がある。これをどうにかしたいと思う」。

「ついでに2003年にてのはしが結成されました。そして炊き出し夜回りで相談をした路上生活者にボランティアスタッフが同行して生活保護を申請するようになりました。」

しかしそのころの福祉事務所では、男性で65歳以下・病気がない人には保護申請を認めず「働いてください」「仕事がないなら自立支援センターに入って就活して

ください」と門前払いするのがあります。明らかな違法なのですが。

坂内「申請に行くとき最初に相談員と言う人が出てくるんですが、何とかその段階で返そうとする。なんとか申請書を書いてケースワーカーにつなげられたら大勝利、アパートに入れたら信じられないくらい奇跡という時代でした。今では信じられないでしょうけれど。」

生活保護申請はいつも役所との「バトル」でした。

第三段階 生きづらさの解明

ところが、バトルの末に生活保護を受けた人が、また路上に戻ってくるという驚くべき事態がしばしば起こりました。「せつかく保護を受けたのになんで路上に戻るんですか?」と思ったのですが、いろいろ聞いてみるといくつかの要因が浮かんできました。

まず一つは、何か障害をお持ちかもしれないということです。そこで2008年から10年にかけて池袋で調査活動をしました。その結果がこちらです。



調査対象路上生活者 164人

最終学歴が中卒以下の人が60%。知的障害の疑いのある人が34%、精神障害の疑いがある人が41%でした。

調査の中心だった森川さんは「野宿の状況にある人たちの間で障害を持つている人が多いんじゃないか?という指摘があつて、その頃は支援者側にも障害があるためにサポートが必要な人がたくさんいるという意識は全然なかつたので調査しました。どうしてそういうことをしたかというところ、福祉事務所や行政など決定権のある側の力が大きすぎて、お金も保護してくれる人もいない人たちの声が全然届かない。そのなかで自分のことをしっかり話せたりする方たちは何とか保護を受けて施設とかに入ることができていた。でも自分のことをうまく話せなかつたり、子供のころ虐待を受けたために、役所の人に高圧的な態度をとられるとしゃべれなくなつたりとかした人がより福祉につながるべくくなつていいる場面がしばしばあり、全体としてはどうなつているかを調べようとした調査です。ちょうどリーマンショックの派遣

切りのときだったので、それまで野宿になるなんて想像もしていなかつた人が精神的にすごく追い詰められていたケースが多かつた印象がありました。「死んでしまいたい」とか、「野宿になつて一週間です」「親子で派遣で働いていただけと切られて・・・」などです。

今調査をしたら、障害を持つ人の割合はもつと多いんじゃないかという気がします。

もう一つわかつたことは、ホームレスの人に役所が紹介する宿泊施設がどうもあまりよろしくないらしいということでした。

例えば、豊島区に実在したある無料低額宿泊所は、二段ベッドがずらりと並んでいて、一人のスペースは二段ベッドの上か下、ロッカーがないので荷物はベッドの下に置きます。プライバシーのない集団生活ですが、利用料は月に約10万円を超えます。この施設の利用者に支給される生活保護費は月に11万円くらいなので本人が自由に使えるのは7500円が標準でした。プライバシーもお金もないというストレスフルなところで、多くの人が施設から逃げ

てきました。

障害を抱えて家を失つた人たちが既存の支援で安定した生活にながめるのは難しいということがわかつてきたのです。

第四段階 新しい支援の模索

そこで、いろいろな団体が集まつて新しい支援を考えて行くことになり、2010年から共同プロジェクトを始めました。「ハウジングファースト東京プロジェクト」と呼びます。

さまざまなことトライしました。全部説明すると1時間かかるので割愛しますが、その中でも大事なのは路上から直接入れるシエルターだろうと考えて実践してみました。

まず最初にやつたのは、広めのワンルूमマンションを使つたドミトリタイプ（ドミトリタイプはシエルターでした。シエルターを開いた坂内さんが語ります）

「清野さんはハウジングファーストのためにシエルターを開いたように言っていますが、これは

歴史修正でして（笑）、森川さんが調査活動の拠点として借りたマンションが、そのあと使われずに空いていたんです。

なんで私がシエルターが必要だと考えたかというところ、リーマンショックと年越し派遣村があつた2008年の冬に「派遣村に行けば泊られますよ」と話して行つてもらつた人が、派遣村に合わなくて池袋に戻つてこられたんです。「じゃあ、明日相談しましょう」といって別れた次の朝に警察から『あなたの名刺を持つていた人が山手線に飛び込みました』と電話がかつてきて、棺桶でご対面しました。

私はその時点で炊き出しに参加して8年くらいたつていて、炊き出しをやつては解散、やつては解散を繰り返していたんですが、結局、泊まれるところがなやダメなんじゃないかと思ひ、会議で提案したけど『やっぱり今のものでは無理』と否決されました。でもこの部屋が空いてるじゃないか、空いて

るなら泊めちゃえというのが始まりです」

路上で出会った方にすぐ泊まってもらい、生活保護につなぐということをして、利用者からは大変感謝され多くの人が路上から脱しました。ただ、夜も鍵は閉めないという方針もあって、いろいろな方が入れ代わり立ち代わり入られるので、人間関係のトラブルもいろいろありました。

寝泊まりするのは個室にしたほうがいいんじゃないかと思つて次にやってみたのがシェアハウスタイプのシエルターです。個室は4つあって、お風呂トイレ食堂は共同で、支援員が常駐するので人間関係のトラブルもないだろうと思いましたが、でも、住んでいけば毎日顔を合わせますから、やがて「あいつと一緒じゃもう嫌だ」「怖くて居られない」と言つて出ていく人もいたんです。

第五段階 ハウジングファーストの実践

どうしたらいいんだろうか？と考ました。私たちは支援員に見守られていることが大事じゃないかと思つていたので、ひよつとしたら見守りがあるよりも、一人で暮らせるほうがプライバシーが守れていいんじゃないかと考え直して、普通のアパートをシエルターとして提供するのを始めました。六畳間くらいのワンルームで、冷蔵庫やテレビ・エアコンなど生活に必要な家電は一通りそろっています。

そして、こつこつという部屋がありますけど、どうですか？つて聞くと「施設なんかいやだ、生活保護は受けない」とか言つてた人が「あ、アパートなら入りた」といという声は圧倒的だったんですね。7年間やって160人くらいの方が入られました。1年後アパートに定着した人が約84%。従来の集団施設での支援よりもずっと成功率が高い。

我々はこれを日本の支援のスタンダードにしたいと思つています。

それ以来、連携団体のつくろい東京ファンドと協力してシエルターをだんだん増やしました。それでも都内の支援団体全部合わせても100室はないですね。本当に少ない。今、てのはしが運営しているシエルターが25室ありますが、常に満室で、空き待ちの人が現在12人です。他の団体もみんな同じだと思います。

第六段階 孤立孤独をどうするか

シエルターをしばらく利用してご自分のアパートに移られた方が現在130人くらいいらっしゃるので、我々はこれ以上がりだと思つたんです。これで完璧だと。ところが違いました。アパートに定着したと思われた方にさらなる危機が訪れます。

が失われてひとりぼっちに。話す人もいない。誰からも必要とされていない。さらに、役所からいろいろな書類が来るけど難しい言葉が並んでいてどうしたらいいかわからない。昔の借金も追いかけてくる。隣人の音がうるさい、またはうるさいと言われる。にらまれる。ドアがバタンと閉まる音が自分を攻撃しているように思える。不安で不安で、昔の路上生活の方が精神が安定した、もう出ていきたいと思つた人がいらつしやうて、再路上化する人が決して少なくないんです。先ほど84%の成功率とお話ししましたが16%は途中でどこかに行つています。

これまでの話を当事者目線でまとめ直すと、この20年間、当事者の苦勞はこのように変遷してきたと思います。

- 1 死なずに生き延びる
 - 2 生活保護を受ける
 - 3 集団の施設からアパートに入居する
 - 4 アパートに住み続ける
- もちろん、1から4までみんながスツツと移行してきたわけ

はなくて、いまも1の人もいらっ
 しゃいます。2の人もいて、こ
 の前も福祉事務所の「水際作戦」
 にあつて保護を受けられなかつ
 た人もいました。そして集団生
 活の施設に今も数万人の人が住
 んでいて、我々が持っているの
 はせいぜい百部屋。全く太刀打
 ちできない規模の差です。

それでも、昔から比べれば生
 活保護は受けやすくなり、福祉
 事務所の対応もよくなった部分
 がたくさんあります。心ある役
 所の職員の方も、味方になつて
 くれる方も増えてきました。そ
 して今日もたくさんの方がここ
 に集まってくださっていて、こ
 の問題に心を寄せてくださるよ
 うになりました。

これから新しいことが必要だ
 と思います。とくに、アパート
 に入った方にどういうことをし
 たらいいんだろうかと。

とりあえず考えることはつな
 がりを保つこと。そのための重
 要な役割を果たしてくれている
 のがゆうりんクリニックです。
 誰かがシエルターを卒業したら
 我々は次の方をお迎えしてそ

の方の支援で手いっぱいになる
 のですが、ゆうりんクリニック
 にかかつていればドクターが相
 談に乗ってくれる、訪問看護が
 体調のチェックだけでなく役所
 への同行やゴミ出しまで一緒に
 やってくれる。つながっている
 人は我々も安心です。

そしてまた、いつでも事務所に
 来てね、炊き出しも来てね、と
 言っています。会えたら「おー、
 元気かい？」と挨拶をするし、
 暑中見舞いや年賀状も出してい
 ます。しかし、

数が増えれば増えるほどつな
 がりは薄れてくるので我々が全
 部ケアするというのは不可能で
 す。みなさんが地域の普通のオ
 ジサンおばさんお兄さんお姉さ
 んになつて、そのときに地域に
 つながる人や場所があるという
 のが重要かつ必要になると思
 います。

ということ、本当はあと3
 時間くらい話したいところなん
 ですが、今日はここまでにし
 ます。皆さんありがとうございました。



清野賢司

田屋さん

森川すいめい

坂内孝雄

当事者座談会

今日は、路上生活を経験したことがある3人に来ていただきました。みなさんてのはしに繋がって路上を脱し、いまはそれぞれのアパートで生活しながら夜回りなどのボランティアをされています。

Aさん 50代男性 東北出身
Bさん 40代男性 関西出身
Cさん 40代男性 九州出身
司会 清野賢司

*個人情報保護のため一部を改めています。

では、つらいことも語っていただくことになると思いますが、路上生活になったきっかけを教えてくださいますか。

Aさん：私は東北の出身で、東日本大震災で被災して仕事がなくなってしまうんです。東京なら仕事があるだろうと思って上京したんですがうまくいなくて。

Bさん：自分は仕事で会社に大きな損失を出してしまって、仕事

を辞めたんです。心が弱いものですから、もうおしまいにしてしまうと思って、最後の思い出作りと思つて東京に出ました。でもお金が尽きて路上生活になったときに、命を手放すのが怖くなつたんですね。・炊き出しを回っているうちにてのはしに出会いました。

Cさん：僕は中学を出てからずっと働いてたんですが、障害もあつてうまくいかなくて、二十代で大阪に出たときに路上生活になりました。それから大阪や東京を転々としていました。三年前に東京に出て池袋駅に座っていたらてのはしの夜回りで声を掛けられたんです。

司会：それからのはしのスタッフと一緒に福祉事務所に行つて生活保護を受けられました。最初は皆さん無料低額宿泊所に入られたんですね。どんなところでしたか？

A：いやでした。宿泊所の支援員が口が悪いんです。部屋に人を入れたら罰金二万円取るぞ、とか。

Bさん：苦しかったですね。一人一人生活のリズムが違いますから、お風呂もトイレもなるべく我慢して回数を減らしたりとお互いに気を遣つて、それがやはりストレスになりましたね。

Cさん：僕もそういう施設に五回以上行きましたが、人間関係とかトイレに行くときとか気を遣いました。

司会：その後、お二人はシエルトーも利用され、お一人はドヤを経由してアパートに移られました。自分のアパートってどんな気分ですか？

A：集団の施設からやっと一人になれてうれしかったですね。

B：住みやすく快適です。夜も静かです。

C：ゆつたりした気分で落ち着いて生活できます。

司会：そうですね。

「実は、このへんまでは事前に考えていた内容だったんですが、

この前打ち合わせをしたときに想定外の話がありました。みなさん40代50代なのでアパートに落ち着いたら仕事探しをされたんですが、そこにまた苦難があつたと。」

B：自分は面接で履歴書を出すのがすごく怖かったですね。「この空白期間なんですか」って聞かれちゃうんです。そこで正直に話しますが相手から「そんな理由で？」って言われちゃうんです。僕自身は大変なことをしてしまつたという自責の念があるんですが、相手からはそんなのはたいした事じゃないと扱われて。それで、またみじめな気持ちになつちやつたことがあります。

司会：せっかくく自死を思いとどまつてアパートまでたどり着いて、これから仕事に復帰と言うときに空白期間を問題にされて、傷を深めてしまふんですね・・・。

B：今でも職場で仲良くなつた人に身の上話をしても反応は冷たいですね。当たり前かも知れないですけど。辛い気持ちにな

ります。

A:自分も面接で履歴書を見られて、空白があると「この期間中は何をやってたの」と聞かれて答えられないときがありましたね。辛いです。

司会:そんなの適当に書いてくればいいじゃんって思うんですけど、ダメなんですか？(笑)

A:それはヤバいでしょう。ダメですよ(笑)。

司会:そんなことがあるなんて全然知りませんでした。正直に履歴書を書いて、正直に傷ついているんですね・・・

C:僕はお二人とは逆で、転職回数がすごく多いので、転職時期をずらして書いたりとかしてました(笑)。

司会:でも、今どうしてますか、って聞かれたら「生活保護を受けています」と言わざるを得ないですよ？

C:それはもう正直に話します。司会:そのときの面接員の反応ってどんな感じですか？

C:人によりますが、「生活保護かよー」って言われたこともあります。

司会:それはいやですよね・・・そういうときはどう思うんですか？

C:グサツときますけど、気を取り直してまあ「生活保護ですけど何か？」って思います(笑)。

司会:すごいですね。そういうところは採用されますか？

C:採用されないことが多いです(笑)。そういうところは最初から縁が無かったと思うようにしています。

司会:すごい。強いですね。Bさんはスーツ着ている人を見るとグサツとくるとこの前教えてくれましたが。

B:はい。社会から取り残されたような気分になります。僕自身が弱いなだけなのですが。

司会:そんなことはないと思います・・・最後に、今の生活の様子と、これからの夢を教えてください。

A:ちよつと前まで掃除の仕事を少ししていたんですが、上司からのハラスメントを受けて辞めたんです。実は2年前に大きな病気をしたんで、きちんと身体を治してまた清掃で働きたいです。そのためにはタバコと酒をやめないといけないんですが、難しいです(笑)。

司会:ほんとですよ、死にますよ(笑)。

B:いまは事業所に所属して公園清掃やビルの設備点検などの仕事をやっています。もともとビルメンテナンスをやっていたのでやりがいがあります。でも生活が安定するとどんどん欲も出るので、もつと自分自身を満足させたい、人に必要とされたいという気持ちが出てきます。前の会社は「自分はもう必要とされていない」と思って辞めので、必要とされる仕事に就きたいですね。

C:僕は公共施設の掃除を朝6時半から9時半までの仕事を週6日やっています。もう2年になります。夢は・・・出来ればフルタイムで働きたいですけど、しばらくはこのままで行こうと

思います。

司会:ありがとうございます。辛いこともたくさんあったのに、勇気を出して語ってくれた皆さんに拍手をお願いします。

文責 清野賢司



各セクションからの報告

【1 炊き出し・衣類配布】



大野力

大野力と申します。アメリカ力のハッソン大学というアメリカ人も知らないド田舎の大学を卒業し、365日ドクターペッパーを飲んでるドクターペッパー中毒です。炊き出しは第二第四土曜日、平均550人の方が毎回公園にいらしています。第一土曜日の午前中は衣類配布を行っており毎回120人の方がいらしています。衣類だけではなくカバンや靴や日用品などできるかぎり

必要なものを配布しています。てのはしの炊き出しはただ食品を配るだけでなく医療相談・生活相談・法律相談・鍼灸全体の各セクションの連合体です。

炊き出しや夜回りでお会いする方の中で、なかなかSOSを出さない方がいらつしやいます。施しは受けないぞ、と何も受け取らなかつたり。それはその人にとつて相談しようとするタイミングではないんですね。今じゃない、その人たちにとつては今。は相談のタイミングではない。じゃあいつなのかというところ。それぞれが向いたタイミングがありまして、それが数か月後、数年後なのかわかりませんが、皆さんのタイミングがあります。いつでも池袋の公園に行けば相談できることが大事だと私は思っています。だからそれぞれ別のタイミングを重視して池袋の活動を継続することが大事だと思います。

では、活動を中心的に担ってくださっているボランティアリーダーのみなさんから。



酒井さん

炊き出しの運営メンバーが12人くらいいるんですが、大野さんの呼びかけに誰も反応しなかつたので私がご指名を受けて発表する羽目になりました(笑)。初めてテノハシの活動に参加したのは、一番上の28歳になる子が高校2年生の時でした。当時子どもの通う高校のPTA会長をしていたのですが、別の高校の会長をしていた方に

炊き出しのボランティアをしないかと誘われたのがきっかけです。その時は、文京区白山のお寺でご飯を炊き、具沢山の汁物を作っていました。ただ、家庭の都合で年末年始しかボランティアができませんでした。やっと家庭の方が落ち着いたと思ったら、コロナになり、てのはしではボランティア募集をしない期間が続きました。募集を再開したタイミングで再度申し込みを行い、それからはできるだけ参加させていただいています。

PTA会長をしていたと申しましたが、PTA会長の集まり(都高P)の中で子どもの貧困部会を立ち上げて、さまざま活動をしてきました。自分自身も自治体職員として生活保護のCWや子ども家庭支援センター職員

を経験してきました。自分の意思や努力とは関係なく、貧困に苦しむ方に少しでも役に立つことをしたいと思い、ボランティアに参加しています。

今、続けられているのは、一緒にやれる人がいるからです。参加を再開した時に一緒にレクチャーを受けた堀江さんという方いらして「次も行きませんか？」と声をかけ合い、堀江さんがくるなら次も行くこうと思うモチベーションがあったからだと思っています。

普段は何も考えずにただ楽しいから続けているんですが、今回改めて考えると、立場も性別も年齢も全然違う人たちと知り合いになって同じ立場で目的に向かつて一緒にやっていくということとは他にはなかなかないので、これが続けている理由かなと思います。



幕内さん

テノハシ参加の契機、続ける理由、これからの願いのテーマを与えられました。まず、私の心情としている事をお話しします。20代のころ、富山県の里山で開かれた3泊4日のキャンプで、「やる者がやる時に世界は変わる」という言葉に会いました。「やる意志を持ったものが、やると決め、行動した時、自分の世界、周囲の世界が変化する」ということで、その後の私の行動指針となりました。もう一つ、60数年前、九州筑豊の炭鉱労働者や文筆家が集ったサークル村の運動では、「やる者はやらない者

を見下さない。やらない者はやる者の足を引っ張らない。」というのがありました。「知恵あるものは知恵を、力あるものは力を、金あるものは金を、それら無きものは笑いを」という考えも流れていたそうです。このエピソードも私の行動指針となりました。時は流れて、定年退職前、池袋東口公園で不思議な光景に出会いました。白いキャップと水色の衣服を着たキリスト教シスターが何人もいて、テノハシという名の沢山の人たちがいて、食事をしていました。その風景が強く心に残りました。退職後、親友との会話で、テノハシの話となりました。引っ込み思案で人見知りする私を親友が背中を押してくれ、ボランティアに加わりました。

切り台を作り、ガスコンロを設置する。大釜、寸胴鍋、大きなクーラーボックス、食器を洗う。切れない包丁で肉野菜を切る。これをお喋りしながらワイワイとやります。これが楽しい。より一層心に残るのは昼食。2階に皆が集い、白飯に納豆、生卵、缶詰めの魚を乗せ、焼きそばを乗せ食べる。私は家族というのは、「ある時、ある場所で、一緒に食卓を囲む人」と定義します。光源寺2階に家族ができません。これが心地良い。「飯は天である」という言葉を実感します。さて、病は気から。孤独は万病の元と思います。「コロナ以降、公園で靴、鞆を配る時、ほんの一瞬でもいい、人と人が繋がっている、そんな繋がりを醸し出したいと思います。弁当を貰ってハイサイヨウナラの場にも、ほのぼのとした情愛、温情、温かみ、繋がりが流れたらいいなと思

います。人は小さな繋がり感情が心に静かに貯まっていて、それが生きる力に成り、死なない力に成ると思います。

これからもそんな想いと、自分の健康維持のためにテノハシを続けていきたいと願っています。



林さん

皆さん、こんにちは。豊島区在住、50代の林と申します。

テノハシ20周年おめでとうございませう。私なんぞよりテノハシの活動に長く尽力されている先輩方が多い中で、今日は発言の機会をいただき、恐縮です。

私は30年超に亘るメガバンク勤務において、マネジメント層として多種多様な運用商品、保険商品、遺言などを活用した「真にお客様にお役に立つライフプラン提案」に従事してきました。その後、上場機械メーカーグループの役員として中期経営計画の策定や事業会社のM&Aなどに従事した後、一昨年6月に現勤務先である公益財団法人に転職しました。

現職では、亡くなられた後、ご自身の大切な資産の一部を社会貢献に役立てて欲しいという尊い想いをお持ちの方が、遺言書を作成される際のお手伝いをしております。

活動参加のきっかけ

元々2011年の東日本大震災において6回、被災地支援ボランティアに参加したことをきっかけに、その後熊本地震、九州北

部豪雨、岡山県真備町の水害、千曲川の氾濫、大分県球磨川の氾濫、新潟県村上市の川の氾濫、昨年は能登の珠洲市の地震など全国で頻発する自然災害の被災地支援に行っております。すなわち災害系ボランティアが中心でした。

そんな中、もっと身近なところで役に立っていることはないかとネットで探していたところ、テノハシの活動を目にして、微力ではありますが、一昨年の4月に参加し出したのが始まりです。

③現在も活動を続ける理由

勿論、参加当初テノハシの清野代表のレクチャーを受け、感銘を受け、活動の趣旨に賛同したことが出発点ではありません。

また、現場で弁当や衣類を受け取られる利用者の方から「ありがとう」と言われることも大きな支えになっています。

一方で何故続けているかと聞かれ突き詰めると、「自分がやりたからやっている」というシンプルな答えに辿り着きます。よく幸福学の先生方が人生100年時代を迎え、人生がマルチステージへと変わっていく中で、人はお金と時間を他の人の為に使った方が、より幸せと感じると言われますが、私も他の人の為に役に立っていると思えることが自分自身の幸福感に繋がっているから続けているのだと思います。

活動の場を与えていただいているテノハシ並びに利用者の皆さんに御礼を申し上げます。

【2-1 おにぎり作り】

毎週水曜日夕方からボランティアが集まり、アルファ米でおにぎりを作っています。参加される皆さんには休憩時間のお茶会も楽しみになっています。また、月に1回くらいのペースで自由学園の生徒さんが白米を炊いて握って下さったり、あさやけベーカリーでもパンと一緒に白米のおにぎりを作って下さることもあります。その数約120〜130個。夜9:30から池袋駅前公園（通称うなぎ公園）でいけぶくろ茜の里さまが提供して下さるパンとともに配布しています。

おにぎりの列には午後の早い時間から並ばれる方もいらっしゃる、食料の支援を求めるだけでなくコミュニケーションの場となっている様子もつかえます。生活相談も受け付けています。

【2-2 夜回り】

駅前公園でのおにぎり配りの後は簡単なミーティングで先週の状況を確認し、4つのコースに分かれて路上等で暮らしている方々に会いに行きます。TENOHASIの活動としては唯一のアウトリーチで、季節や天候に左右されますが、毎回40人ほどの方とお会いし、お変わりがないか状況を確認しています。困ったことがあった場合、スタッフに声かけをしていただける関係が築ければと思っています。

次に実際に夜回りに参加されている方から、活動への思いを語っていただきます。 大野力

Sさん：主に西口を回っています。繁華街なのでホームレスの人は少ないんですが、一つエピソードを紹介すると、かつてスマートフォンをなくして生活に

困っている方がいらしたとき、てのはしの大野さんに連絡して、生活保護の申請に繋がりが、今も頑張っているらしいです。夜回りでお会いする方の数は少ないのですが、そうやってかわり続けていこうと思います。



崎山さん

私はラジオで取材してしゃべる仕事をしています。15年くらい前、豊島子どもWAKUWA KUネットワークの子供の居場所づくりの取材をした時にWAKUWA KUの天野さんから「池袋では路上生活者の支援をしている人たちがいるから取材してはどうですか」と紹介され、私

自身も豊島区に住んでいることもあって、夜回りに参加しました。

ただその後東日本大震災があったり、夜のニュース番組の担当になったりして、夜回りには行けなかったのですが取材を続けていたら、2018年ごろに清野さんから「ボランティアが減ってるのもう一回来てもらえませんか」と言われて夜回りを再開。さらにコロナになったころに夜の番組が夕方に移動して夜が自由になったので、それからはほぼ毎回夜回りに来ています。

そして今年60歳になり、このまま仕事しながらボランティアを続けるかどうかは私にもよくわかりませんが、自分に縁のある豊島区でつながっているし、自分に何かあったらこのつながりが助けてくれると甘い考えを持ちながら、そんな感じでやってきた十数年の生涯(?)でした(会場爆笑)。



北川さん

主に東口のコースをボランティアと職員の高橋さんとで回っています。当事者で携帯電話をお持ちの方とはなるべく連絡先を交換し、情報交換とネットワークづくり心がけています。昨年、高齢の方が倒れたとの情報をもらって高橋相談員と連絡を取りあつて緊急搬送し、一命を取り留め、その方は今では施設でリハビリに励んでいます。当事者に新しく来られた方の情報をいただいたり、外国の方には英語ができる大野相談員に対応してもらったりしたこともあり

ます。ボランティアとしてできることは限られています。よりよいおにぎりコミュニケーション作りを心掛けています。

【3 シェルター】

最初の座談会でもお話ししたように、私たちは、家を失った人が回復するためには、安心できる住まいが必要という「ハウジングファースト」を日本で実現させたいと考えています。

TENOHASIは現在、豊島区、練馬区、板橋区で25室のシェルターを運営しています。シェルターは普通のワンルームのアパートやマンションで、トイレ・風呂・一通りの家具がついているので路上生活だった人も入居すればすぐに生活できます。そして、担当の生活相談員がついて生活再建のお手伝いをします。

原則4か月の短期契約です。そ

して生活保護を申請し、契約期間内に自分のアパートに引っ越しすることを目指します。

シェルターに入られる方の多くは、路上生活中に携帯電話身分証も銀行口座なども全て失っていてそのままでは普通のアパート契約ができません。住民票を復活させて、マイナンバーカードをとつて、携帯電話を手に入れることが必要になります。そのような手続きが苦手な方も多く、生活相談員がいっしょに進めています。

病気や障害のある方は医療が必要ですが、でも路上生活時代に病院に行つてひどい扱いを受けたという方は多く、病院というところはとてもハードルが高いです。

そついう人を丁寧に診てくれるのが、先ほどの森川さんたちが作つたゆくりんクリニックで、その存在はとても大切です。

それらの準備がきたらアパート探しです。皆さんご存じと思いますが、生活保護を利用していらっしゃる方、障害のある方、高齢者はなかなか貸してくれる大家さんが見つからず物件探しは大変です。どうにか契約までこぎつけたら、初期費用を生活保護で出してもらい、家具や電化製品をリサイクルショップで注文します。電気やガスなどの手続きも行いますが、いままで一度もアパートに住んだことがない人も多く、こちらも一つ一つ相談員が手伝います。

「ご自分のアパートに引っ越し出来たらシェルターからは卒業となりますが、その後の生活で困りのことがあればいつでも相談にのりますし、実際に最近も相談を受けました。これからもTENOHASIがある限り相談にのりたいと思います。」

田中のり子

【4 生活相談】



田中のり子

〈生活相談員になるまで〉

私は夜回りでは池袋駅構内コースをてくてくと皆さんの後をついて歩き、新しい方を見かけた時など声かけをしています。炊き出しでは公園の真ん中に並べた机で、並ぶ方を順番に聞き取りをしています。

私がテノハシで生活相談・同行支援などのお手伝いを始めたのは2017年1月からでした。最初、相談の数は段々と落ち着いていくように見えました。私が生活保護申請同行、清野さんがシエルター入居者支援をして

いればそれでうまく回っていた時期もあります。

元々私は子ども達が抱える問題、その現在と未来を考察するためにテノハシに入ったのですが、現場で神経発達に大きな特徴を持つ方が多いな、そこに社会が合わせられなくて苦労させられてしまっているな…と気づくことがありました。そこで子供支援の現場に入って学習の場面における合理的配慮の方法を周囲に理解してもらおうと思いい、学習支援員の民間資格を取り、コロナ直前までの一年間は子ども支援の活動を行っていました。

〈コロナ禍襲来〉

ところが新型コロナで状況が一変しました。てのはしで手が足りないといわれ炊き出し現場にいつてみたら相談者が殺到しててんでこ舞いの状況でした。生活保護という言葉がこんなにクローズアップされたこともなかったんじゃないかなと思います。そこからほとんど誰も乗ってい

ない電車に乗り現場へ駆けつける日々が始まりました。炊き出し現場にはマスコミも殺到。これほど「生活保護」という言葉がニュースで注目されたことはなかったと思います。その宣伝効果で炊き出しと生活相談にはさらなる長蛇の列。てのはしが運営するシエルターは6室から25室に増やしました。他の団体活動も活発化しました。つくりい東京ファンドがやっている世界ビバークという一時的な宿泊の支援をする活動や、つくりいさんが運営するシエルターも増設され、反貧困ネットワークや若者支援のサンカクシャのシエルターに相談することも増えました。

また各地域で新しい団体をつくりたりして、私は町田で「生活困窮者支援りぼん」を立ち上げました。同じくてのはしスタッフの幸田さんが「わかちあい練馬」をリードしています。

〈住まいを失った人への支援〉

相談の内容も多様化しています。が、やはり大半は、住まいを失った方からの相談、生活保護や自立支援センターにつないでほしいという相談です。ネットカフェ生活になつたいわゆるネットカフェ難民の人たちの存在がはつきりと視覚化されてきたのはここからだつたと思います。女性、若者がこれほど相談の場に訪れてきたことはありません。

生活保護申請を申請しても集団型施設に入れられてそこから逃げる、またホームレス、また生活保護申請、また集団型施設から逃げる、ホームレス、生活保護申請、またまた集団型施設へ…。私たちはこの悪循環を止めたい。ハウジングファーストを実行することで余計な放浪生活を止めたいと私たちは考えています。

〈福祉事務所との交渉〉

時々バトル

私たちは相談を受けて、生活保護を申請することになったときは原則として同行するようにしています。福祉事務所が生活保護申請をさせないようにする「水際作戦」がいまだにあるからです。最初の相談の時に「なんでも前の施設から逃げて来たの」「これまでいくつの自治体で保護を受けてきたのか全部言いなさい」「あなた直前にここで受けてたじゃない、なんで正直に言わないの」など言われたりして、そういうとき一人では心が折れて「わかりました、もういいです」になってしまふからです。

また、集団型施設から逃げて来たけれど、そこに入れた福祉事務所の生活保護がまだ廃止になっていないと「あなたはまだ〇〇区で保護を受けていますからここでは相談できませんよ」と言われてそれで終わりになってしまう。元の施設に帰る交通費もないし、そもそも戻れ

ません。そういうときに私たちが引き取るんですが、ちょっと凶々しい職員さんだと「は〜い、てのはしさんよろしく〜」って丸投げされて、「あなたは何をしてくれるんだ？」と思うんですが、仕方ないので「はい、わかりました」となることもありませす(苦笑)。そうなる前福祉事務所に「もうそちらには戻らないので生活保護を廃止してください」と連絡して廃止してもらう必要があり、それまでの生活費はてのほしで支援します。でも意地悪なところだと「担当がいませせん」「いませせん」とずーっと放置されて無視されて、本人曰く「前もそうだった。だから施設を出て二ヶ月くらい放浪した。自殺を考えて富士の樹海に入ったこともある」。大変な交渉を続けてその自治体の議員にも「何とかしろ」と言っちゃってください」と頼んでやっと廃止が決まってる、次の自治体で申請するんですが、ではどこで寝泊まりするかという問題が次に生じま

す。てのほしのシエルターは常に一杯なので、他の支援団体のシエルターやドヤ(簡易旅館)の空きを探して何とか入れてもらうこともあります。

また、障害を抱えた人が申請すると「こんなに生活保護を何度も受けては切っている、問題があるはず。一人暮らしダメ。施設に行ってください」と言われしてしまうことがあるのですが、障害があるからこそ集団施設は無理な場合には「精神科のゆるりんクリニック(連携団体)につなげますから、なんとか施設ではない方をお願いします」と交渉することもあります。

〈相談内容の広がり〉

相談者の層が広がり内容も多岐にわたるようになりました。すでに住まいのある方、生活保護を受けている方からの相談も増えました。「アパートでトラブルがある、転宅したいがどうしたらいいんだろう」とか、「光熱

費を延滞してしまつて止められちゃう、どうしたらいいんだろう」とか、アパートの契約更新料は生活保護で出ることを知らずに、「督促状が来てしまつた、もう僕が出るしかないですよね」と言つ相談とか。

「ケースワーカーとうまくいかない」「就労指導が辛い」という方の場合、「この方はこういう背景があつてまだ就労できる段階ではありません」と代弁しに行くこともあります。親子連れの方が炊き出しに並んでいてびっくりすることもあります。「実は僕のことじゃないんですよ。知りあいだで困っている人がいて・・・」という相談もあつて、どんどん広がっています。

しかし、まだまだ水面下でくぐもつている相談もあるんだろうと言つことを肌感覚で感じています。アウトリーチする方法を考えていかなければならないとスタッフ一同考えているところです。

【5 日中活動と医療相談】



武石晶子

〈日中活動〉

路上を卒業した方も現役路上の方も共に生きる活動として行っているのが日中活動です。

パン作り：毎週水曜日の夜回り配るパンを自分たちで作っています。コロナ前は毎週、コロナになってから月2回行っています。ちなみに今日もみんなでパンを200個焼いて、ご寄付頂いた方にプレゼントしています。他の活動で人気なのは料理教室です。他にもライブハウス（歌う会）、英語やフランス語教室、大学から受注したお守りづく

り、田屋さんを講師に段ボールハウスづくり（笑）などもやっています。コロナ禍になってからはコロナ対策衛生キットという、炊き出し夜回りで出会う方にお渡しするマスクや消毒液などのセットを作る活動をしました。季節の行事も大事にしています。クリスマス会・お花見・バーベキューなどが付けば食べばかり。羽田空港や鉄道博物館に遠足に行った時もかならずお弁当を作って持っていました。みんなと一緒に食べるのはとても大事だと思っています。読書会もやっていますが、いろいろなボランティアさんが企画してくれたのに人気がなく、焼きそばを作ってみたら参加者が増えるという・・・（笑）路上はもちろん、地域で暮らしていても一人で孤立孤独になつてしまうことが多いので、行きたい時に来れて仲間と一緒に過ごせる日中活動って、とても大事な場だと思います。コロナ禍でいったん縮小してしまいましたが、これからまたやっ

ていけたらと思います。自分はこんなことができるという方がいらしたらぜひ立候補してください。

〈ほしぞら医療班〉

炊き出しの場で医療相談を行っています。医師や看護師はじめ運営にも、色々なボランティアが毎回25人くらい参加してくださって、内科・発熱専門・こころの相談・歯科、フットケアなどやっています。

コロナ禍前は30〜40人が相談にいらしていましたが、現在は70〜90人に増えています。お渡しできる薬はドラッグストアで売っている風邪薬やシップなどで、毎回血圧手帳を持って測ってもらう人もいます。また治療が中断したりしている人や、生活保護を受けているけれど本人が望む医療につながれていない人、住まいが騒音や隣人トラブルで心身の不調をきたしているけれど福祉事務所が許可しないと引越できない人などに医

師の紹介状を発行しています。最近では移民・難民の方の相談も増えています。身体が不調の時は助けてと言いやすいのかと思います。その不調の背景にどんな生活の困りごとがあるのかを丁寧に聞き取って生活相談につなげることもしています。

安心できる住まいがないと治療はできません。「住まいは健康にいい」とあるボランティア医師が宣言しているように高血圧や糖尿病などは長期に治療が必要で路上生活では治療できません。まずは住まいに入つて安心していただいてそこから医療につながる。私たちは医療支援単体ではなくて住まいと生活全体を支える包括的な支援を目指しています。これからは支援を必要としている方にどんどん出会っていきたくと思っています、アウトリーチも実現していきたいです。また国籍を超えた支援活動もしていきたいと思っています。ほしぞら医療班を今後ともよろしくお願ひします。

課題とこれから



幸田良佑

「この「20周年のつどい」を通じて、皆でTENOHASIのこれまでの歩みを共有し、これからどのように活動していくのか、ということを確認しあう良い機会となりました。前半ではTENOHASIのこれまでと現在、そして直面している課題について報告しました。私からはそれぞれの課題を踏まえ、TENOHASIはその課題に対してどのように取り組んでいくのか、ということ報告します。

1. 高止まり状態にある炊き出し利用者数

まず第1に炊き出しの配食数が減らないという現状があります。この炊き出しはもともと路上生活状態にある方へ1食を提供しようとはじめた活動でした。池袋の駅構内、周辺で寝泊まりをされている方は少なくなってきたいます。しかし、炊き出しに並ばれる方の人数は減りません。わたしたちはいま、「路上生活者支援」という形での炊き出しから「広く生活困窮状態にある人への炊き出し」へと変化してきているのではないかと考えています。どのような状態にある方が何を求めて炊き出しに並ばれているか、これを捉えてみたいと思います。そのためにもまず3月第4に実施する炊き出しにおいて、炊き出し利

用者を対象としたアンケート調査を実施します。居所の有無、諸社会保障制度を利用した経歴、就労の状況などを伺う予定です。本調査の結果は次号会報誌と当法人ウェブサイトに公開する予定です。

2. 地域で生活し続けることの困難

生活相談・シエルトアの報告で「地域で生活し続けることの難しさ」についてお話をしました。生活保護を受けている方が更新の時期になつて更新料が支給されることを知らずアパートを出て野宿状態にあつたり、騒音や近隣住民とのトラブル、ケースワーカー、支援者とのコミュニケーションの問題、手続き、支払いの不安などが挙げられます。いまシエルトア入居者に限って実施している訪問・見守り活

動を、アパート転宅後（シエルトア退去後）も続けていきたいと考えています。そこで定期的に相談に応じられる関係づくりを図り、生活に関わる危機に立ち会えるような機会を作りたいと思います。また再契約・更新時期を通知し、シエルトア入居時の担当支援員が本人へ連絡、または訪問し、更新に関わる不安を解消する取組みも行っていきたいと考えています。

3. 複合的でより困難な状態にある人々からの相談の増加

現場感覚として、生活相談で受けする困りごと、悩みごとにも変化が生じてきているのではないかと感じています。「昨晩はどちらで寝泊まりされていますか？」「路上・公園・河川敷」が最も多く、次いで「自分名義の家」

「ネットカフェ」と回答が続きま
す。

わたしたちが生活相談を展開
しているのは主に炊き出しと夜
回りにおける屋外での相談会で
す。公園というパブリックな場
所で相談を受けることで安心で
きる人もいれば、外でやってい
ることによって相談できないと
いう人もいるのだと思います。
どんな人でも安心して相談でき
る環境をつくりたい、そのため
に事務所の開放であったり、電
話やメールを通じた相談も受け
ていきたいと考えています。

またコロナ禍以降毎月最終火曜
日に実施してきたお弁当配布
を、個人や企業、団体よりご寄
贈いただいた食料品を放出する
フードパントリー型のイベント
に変えました。災害用備蓄品と
してのクラッカーやアルファ化
米などに限られています。今
後はこの豊島区と隣接する地

域におけるフードドライブとし
ての機能を担うことを意識し、
様々な食料品を受け入れること
のできる体制作りを目指したい
と考えています。

そして相談の内容も多様化して
きています。生活保護の申請や
路上生活状態にある方の脱出
支援についての経験は豊富なも
のだと思っています。一方で女
性や若者、外国籍住民や難民、
仮放免者の相談支援の経験は十
分ではありません。多様化する
相談に対応していくために、研
修の機会の充実はもちろんです
が、当法人が単独で対応するの
ではなく、経験を積んだ複数の
団体と協働して対応にあたる、
そのような体制作りも必要だと
考えています。既に組織化され
ているネットワークやコンソー
シアムへ加入することに加え、
地域の団体と情報交換、連携の
場をつくっていききたいと思いま

す。

そして行政との連携が十分でな
いことも課題の一つです。実際
「シエルターを利用できないか」
と、福祉事務所や自立相談支
援機関などからお問い合わせを
いただくこともあります。住所
不定状態で生活保護を申請した
場合、多くは無料低額宿泊所と
呼ばれる社会福祉法上の施設に
案内されます。ここで保護申請
から決定、転宅までの間過ごす
ことになるのですが、この無料
低額宿泊所と呼ばれる施設は
現在豊島区内に1つしかありま
せん。(届出上は休止中の1施
設を合わせ2施設)定員は25
名です。常に満員なのか、この
3年間、私たちが生活保護申請
に同行した際にこの豊島区内の
施設を案内されたことは1回も
ありません。最近では、埼玉や
神奈川、千葉の施設に案内され
ることが多く、都内の施設に案

内されることの方が稀になっ
てきています。豊島区で長く生活
していた方が住まいを失ってし
まった時に一時的に身を寄せる
場所が1施設それも25名分し
かないというのはあまりに貧弱
なのではないかと思えます。私
たちはハウジングファースト東
京プロジェクトの一環として運
営しているシエルター事業を地
元自治体に引き継ぎたいと考え
ています。コロナ禍の緊急支援
に忙殺され、政策提言や調査研
究を十分に進めることができま
せんでしたが、体制を整え、現
在の施策を世に問い、ハウジン
グファースト型の支援を実現で
きるよう働きかけを続けていき
たいと思います。

こうだりようすけ

財政状況報告

みなさまいつも温かいご支援ありがとうございます。

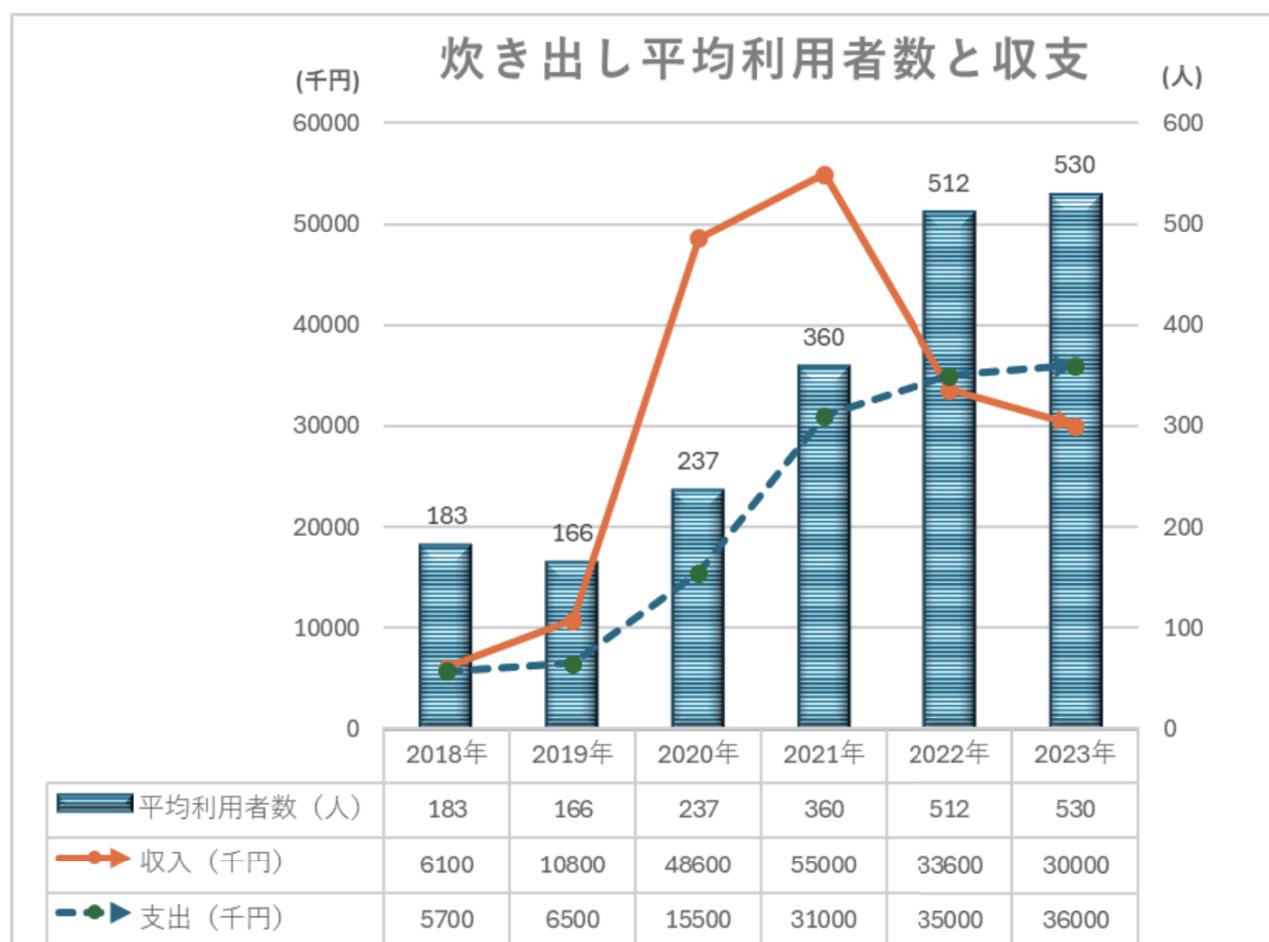
TENOHASIの大野です。
2023年度TENOHASI
I 財政について現況報告いたします。

【報告】

前年度に続き、メディアに取り上げられる回数は少なくなりました。2023年度も可能な限り感染症対策を徹底しながら活動を行って参りましたが、コロナに関連するニュースを皆様が目にする機会は減ったのではないのでしょうか。変わらず多くの方からの相談・支援を行っておりますが、メディア露出の減少に比例して寄付金等の収入も減っています。

【解析】

2022年度では、収入減のなか需要に沿った活動を維持し、支出が過去最高額、単年度赤字となった旨を報告いたしました。



2023年度では、炊き出し利用者数は平均約530人となっており、高止まり状態です。そして生活に困窮されている方からの相談・支援件数は増加しています。ニーズに合わせるべく事業規模を拡大したTENOHASIの支出は過去最高額で推移しており、寄付金などの収入は減少しています。

【見通し】

支出削減の術があまりない中、TENOHASIは拡大した需要に応えるべく活動を継続しています。収入の減少により、前年度以上の赤字となる事が予想されます。当面の活動は維持できるかもしれませんが、しかし、これが続く数年後に預金はなくなるでしょう。

皆様の気持ちのこもったお金・物資をお預かりし、大切に活用させていただきます。

引き続きどうぞご支援をよろしく願います。

大野力

Special Thanks

～この20年間の感謝を込めて～

TENOHASI
・東京路上鍼灸チームTrust
(針灸班)
・ほつと友の会(お茶会)
・つくろい東京ファンド
・ゆうりんクリニック
・訪問看護ステーションフ
ローカ
・就労継続支援BASE
・ほしぞら医療班
・Habitat for Hum
anity
・世界の医療団
・ハウジングファースト研究
チーム
20年間で参加して下さった
数千人のボランティアのみ
なさん
20年間で寄付してくださっ
た数千～数万人の支援者の
みなさん

駒込大観音光源寺／つるや
庚申塚店／いけぶくろ茜の
里／としまNPO推進協議
会／豊島子どもWAKUWA
KUネットワーク／豊島区地
域活動交流センター運営協
議会／東京パブリック弁護士
事務所／ホームレス総合相談
ネットワーク／反貧困ネット
ワーク／自立生活サポートセ
ンターもやい／Collabo
／サンカクシャ／わたカフェ
／豊島区役所／練馬区役所
／板橋区役所／自由学園つ
なげる輪／東京第一友の会
／練馬区職員労働組合／パ
ルシステム／山友会／あじい
る／トイミッケ／豊島区民社
会福祉協議会／立正佼成会
豊島教会／毎日新聞東京社
会事業団／順天堂大学医学
部武田ゼミ／ビッグイシュー
基金／

東京・生活者ネットワーク／
サマリア／ホームレス支援全
国ネットワーク／公的扶助研
究会／釜ヶ崎支援機構／寿
支援者交流会／レーベンエス
テート／鍵屋不動産／練馬
ハウジング／LC・ファース
ト／JAMMIN／青年劇場
／劇団銅鑼／アールリンク／
目白が丘教会／東洋大学社
会福祉フィールド活動支援室
／ありがとうブック／KEE
N／Chrome／フィデリ
ティ投信／やきとりキング／
鳥ひろ／ごきげんファーム／
ネネスキッチン／大塚モスク
(マズジド大塚)
*順不同・敬称略
動画：竹内幹 配信協力：と
しまNPO推進協議会
パン：池袋あさやけベーカ
リーとピアメンバー

【特別企画】

当事者インタビュー

2024年2月17日

今回はTENOHASIのピ
ア・スタッフとして毎週水曜日
のおにぎり作りに参加してい
だいているS・Eさんにお話を
伺いました。

—まず、経歴からうかがって
いますか？

経歴ですか。生まれは岡山県
岡山市で、特別支援学級に通っ
ていました。中学校を卒業して
から働き始めました。

—どんなお仕事をされていた
のですか？

掃除の仕事ですね。6年ほど
続けました。

—6年経つと成人されますよ
ね？

はい、21歳の時に他の仕事も
経験したいと思い、その会社
を辞めました

—そうして4か月ほど就職活動を

したんですがなかなか見つから
ず、親や兄弟からも早く仕事を
しろと言われていたんですが、
ロツテリアの面接を受けること
になって採用されてそこで働く
ことになりました。

—ハンバーガーのロツテリアで
すか？

はい。そこで1年5か月ほど
働きました。働いているうちに
他の飲食店もやってみたいなと
思つて、岡山駅の構内にある喫
茶店の面接を受けて採用になっ
たので、ロツテリアには辞める
ことを伝えて、喫茶店で働くこ
とになりました。そこで2年3
か月ほど勤めました。

—飲食店のお仕事がお好きだっ
たんですね？

はい。その頃は飲食店が好き
だったんですが、ゲームも好き
でゲームセンターでも半年ほど
働き、それからうどん屋さんで
アルバイトをしました。その時、
26歳だったんですが、家族と
ケンカをしまして、家を出て大

阪に行き、建築関係の仕事に就
きました。大阪では寮付きの、
飯場みたいなところにいました。
そのうちに東京の方に行つて、
名古屋、一度大阪に戻つて、京
都にも一時期いましたが、みん
な建築関係でした。

—建築の仕事はきついですよね。
ほかのお仕事はされましたか？

神戸で6年ほどアパートの管理
人をやりました。その時初めて
生活保護を申請し利用しながら
働いていました。そこで落ち着
けるかなと思つたのですが、い
ろいろイヤなことがあり、管理
人の仕事も人間関係もイヤに
なつてまた大阪に行きました。
そこで転々としていたところ難

波の駅で声を掛けられて、ドヤ
(三畳一間の簡易旅館)を改造
した生活保護の施設みたいなと
ころに入りました。その時40
歳近くになつていたのでその夕
イミングで療育手帳を取りまし
た。でも、そのやり方とか気に
食わないことがあつて逃げて

東京に来ました。

—色々大変な経験をされた後、
そこでTENOHASIに出
会つたんですね？

東京に来た頃はお金があつた
んですがそのうち底を尽き、池
袋の駅のとこで寝ていたら
TENOHASIの夜回りです
タッフに声をかけられました。
2020年でした。

—その後、芸術劇場の前で高橋
と会つて、練馬区に生活保護の
申請に行つたんですね？

施設はもうイヤだ、生理的に
受け付けないので、ドヤに入り
たいと言つたんですが、練馬区
ではドヤは扱っていないので自
分で探して来いと言われて、一
緒に山谷に行きました。

—でもなかなか見つからず、大
変でしたよね？

—何件もドヤを見て回つてもいい
ところがないというか、ドヤを
覗いても帳場が空くのが4時と
かで山谷をブラブラしていたら、
山友会の人声がかけてくれて

知っているホテルヒカリというド
ヤに案内してくれて、無事にド
ヤに入ることができました。

—ホテルヒカリに入った後、今
はTENOHASIのボランティア
アとして活動していただいてい
るんですが、その間のことをお
訊きしてもいいですか？

そこには2か月ほどいて、練馬
のアパートに移りました。1回
更新してもうすぐ、6月だった
と思いますが、2回目の更新を
迎えます。仕事の方も続けてい
ます。

—東京に来られてからはどんな
お仕事をされましたか？

最初、就職を探したとき決まっ
てたのは看護助手のお手伝いで
した。そこは3か月の試用期間
があったんですが、その3か月
の目前にイヤになって辞めてし
まいました。

—でも、S・Eさんはお仕事さ
れてない時期はあまりないです
よね？

確かに。辞めてもすぐに新しい

仕事を探したりしていましたね。
就労支援員さんがついていたの
で、その方が障害者を雇用して
いる会社の社長さんを紹介して
くれて、障害者雇用で今の仕事
に就きました。

仕事は清掃で、もう2年以上
続いています。月曜から土曜ま
で、週6で働いています。朝6
時半に現場に行くのに毎日4時
半起きですね。

—4時半！今日もですか？

はい、今日も仕事してきました。
—おにぎり作りの時って終わる
のは8時過ぎますよね？それで
翌日4時半起きて睡眠不足に
ならないですか？

まあ、ギリギリってところです
ね。家帰って、ご飯食べて、シャワー
浴びて寝るのが10時過ぎなん
で・・・

—そのおにぎり作りではベテラ
ンになると思いますけど、いつ
頃から参加されていますか？

2020年にアパートに入った
頃から3年半以上になります

ね。スタッフに誘われて参加す
るようになったんですけど、3
か月くらい経ってから、うち炊
き出しもやっているんでそっちも
参加してみない？って声かけら
れて、炊き出しの配食も手伝わ
ようになりました。今は、炊き
出しにはあんまり行ってないで
すけど。

—おにぎり作りが長いこと続
いているのはどうしてでしょ
うか？

人間関係もうまくいっている
し、あの場が楽しいですね。お
菓子を食べながらおしゃべりす
る休憩時間も大好きですし、夕
バコタイムにもいろいろ話とか
しています。おにぎり作りの場
だけではなくて、プライベート
で仲間との交流もありますね。

—いろいろ伺ってきましたが、
最後に普段の生活について教え
てください。

食事とかは作る時もあれば、
弁当等を買ってきたりもします。
時間があるときはゲームが好き

なので、スマホのパズルゲームと
かやっていますね。家賃や光熱費
も払えているので、実家を離れ
てから家族とは連絡を取ってい
ませんが今は特に問題なく過ご
しています。

—土曜日、早朝からのお仕事を
された後、プライベートに関わ
ることまでお話してくださって
ありがとうございました。今日
のインタビューからも真面目な
S・Eさんのお人柄に触れるこ
とができました。感謝です。



インタビューー 高橋秀子

【TENOHASIがなぜか映画づく】

テレビ新聞の取材はコロナ渦中に殺到しました。その流れなのか、映画がらみの取材が連続できました。

●主人公の女性（木村文乃）がホームレス支援団体の職員、失踪した主人公の元夫がホームレスになつていくという設定で、監督をはじめとしてスタッフが何回も炊き出しに取材に来られました。銀幕に映った公園での炊



き出し・衣類配布の風景がたしかにTENOHASI。主人公は福祉事務所向かいのビルで働いているようなので社会福祉協議会の職員という設定なのかな？
監督の深田晃司さんは

自ら炊き出し夜回りに参加され、その後もヴェネツィア国際映画祭やトロント国際映画祭など忙しいスケジュールを縫って継続的にボランティアに参加してくださっています。

「LOVE LIFE」
2022年公開 深田晃司監督

●主人公の女性（吉永小百合）が下町のホームレス支援団体の主催者で、隅田川河川敷のブルーシートテントにおにぎりを配る活動をしているという設定。松竹山田組のスタッフが取材に来られました。

主人公の女性の家でYOUなどの支援団体メンバーが運営会議をしていたり、震災孤児だった路上生活者（田中泯）がわめきながら隅田川に飛び込むとするシーンなど楽しかったです。日本アカデミー賞で賞を総なめにしたのはおめでたい限り。DVD送ってくれないかな。

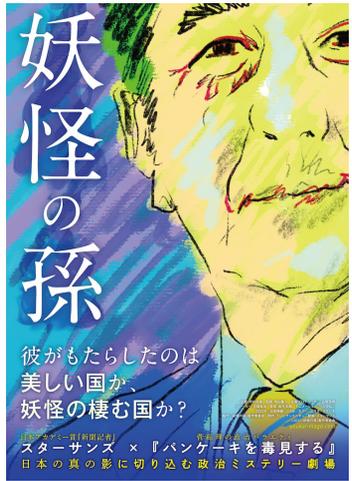


「こんにちは、母さん」
2023年公開 山田洋二監督

●「妖怪」と呼ばれた岸信介の孫である安倍晋三元総理を中心として安倍政権を検証したドキュメンタリー映画。

内山監督の前作の「パンケーキを味見する」のときに「日本の現状を映したい」と清野に1時間くらいのインタビューをされたので、まあそんなもんだろうと思っていたら、「安倍さんの映画で使いたい」ということになり、映画の冒頭に清野がアップで映るというありえない事態が起きました。清野の発言全文。

「我々からするとどう見ても生活保護が必要な状態なんだけども『まだ、迷っていると。でき



「妖怪の孫」
2023年公開 内山雄人監督

れば受けたくない」と。とは言っても、あなたね、仕事も無いし、家もないしお金もないしどうするんですか？と（そうですわねえ…監督の声）。

日本がズーッとやってきて、特に安倍政権がズーッとやってきた生活保護バッシングの成果が今、現れている。

それは世間一般もそうだし、何も生活保護必要な人の心の中にね、『生活保護受ける奴はダメな人間だ』とそういったイメージが強力に巣食っている…それをやったのはやっぱり政治家、一部の方々ですからね。そこは本当に、『あなた、権利って言葉してますか？生存権って何のためにあるか分かりますか』って言いたいですよね。」

いまのところ誰からも脅迫されたり襲撃されたりしていないのでご安心ください。

清野賢司

【ご支援のお願い】

コロナ禍以降、当法人の事業活動はニーズ増大に伴い、拡大し続けています。既存事業の拡大に加え、この数年で新たな事業も生まれました。こうした経緯からこれまでにお寄せいただいた資金も数年のうちに枯渇してしまいます。いくつかご支援の方法をご用意しています。ご都合の良い方法で、かつご無理のない範囲で、ご支援いただけますと幸いです。

＼食料品のご寄贈をお願いします／

2024年度より新たに、過去にTENOHASIが運営するシェルターを利用された方を主な対象とした「訪問宅食サポート」を始めました。「もうTENOHASIとは切れてしまったと思っていた」とおっしゃられた方がいらっしゃいました。引越しをされる方に対して「今後も連絡して欲しい」と伝えてきましたが、その想いを伝えることができていないと感じています。月に1回必ず訪問とそのお土産となる食料を届けることで「TENOHASIはずっと気にかけている」ということを感じてもらいたいと思い企画しました。本事業によりこれまで以上に食料品を必要としています。ご家庭や事業所などで余っているまだ食べられる食料品がありましたら当法人への寄付をご検討ください。

【食料品の送り先】

171-0043 東京都豊島区要町1丁目28-20

特定非営利活動法人TENOHASI

03-6824-5538

宅配ボックスをご用意していますので、曜日、時間をご指定いただく必要はありません。

＼衣類が足りません／

毎月第1土曜日に実施している衣類配布ですが、配布する衣類、カバン、靴が足りていません。80人ほどの利用でしたが、現在は130人を超える方が衣類の受け取りにいらしています。ご家庭や事業所などで余っている衣類、カバン、靴をぜひご提供ください。

なお、衣類は現在男性もののみ募集しています、

- ・ジャンパー ・パーカー ・Tシャツ ・ポロシャツ ・シャツ ・セーター
- ・カーディガン ※LからLLが必要高 ・ズボン ・靴下、下着（未使用のものに限る）
- ・ベルト ・靴 ・リュックサック（容量の大きなもの）
- ・キャリーバッグ（キャスターが劣化していないもの） ・ショルダーバッグ
- ・ポーチ ・タオル、バスタオル（きれいなもの、または新品）

【物資の送り先】

113-0001 東京都文京区白山1丁目30-5 大野方1階

03-6824-5538

宅配ボックスをご用意していますので、曜日、時間をご指定いただく必要はありません。

＼引き続き活動資金のご寄付もお願いします／

TENOHASIは常勤3名、非常勤2名体制で日々の生活支援、相談活動を担っています。支援に必要不可欠なソーシャルワーカーを雇用し続けるためには年間でおよそ1500万円の人件費を必要とします。また炊き出しには年間およそ1000万、シェルターには年間300万の維持費が必要です。お寄せいただいた寄付金を大切にに使わせていただいておりますが、その他経費合わせて年間2800万の資金が必要です。どうぞ引き続きご無理のない範囲でご支援いただけますと幸いです。

【クレジットカードからのご寄付】

1000 円からご寄付いただけます。クレジットカード決済には「VISA」、
「MasterCard」、「JCB」、「American Express」、
「ダイナースクラブ」をご利用いただけます。

<https://www.tenohasi.or.jp/donation/creditcard/>

ロボットペイメント株式会社が提供するクレジットカード決済サービス
「サブスクペイ」を採用しています。決済情報は SSL で暗号化され、安全
に管理されます。また当法人はクレジットカード情報を保有しません。



【ゆうちょ銀行 払込取扱票からのご寄付】

同封した払込取扱票からご寄付いただくことができます。郵便局でお手続きください。

口座記号番号：00190-8-259686

口座名：特定非営利活動法人 TENOHASI

【ゆうちょ銀行からのお振込によるご寄付】

記号番号：00190-8-259686

口座名：特定非営利活動法人 TENOHASI

※ご依頼人名にふりがなをお書きいただくと大変ありがたいです。

【他の金融機関からのお振込によるご寄付】

金融機関コード：9900

店番：019

口座種別：当座

口座番号：0259686

口座名：特定非営利活動法人 TENOHASI

お問い合わせ（担当：小野田）

資金や物資のご寄付に関するお問い合わせは当法人ウェブサイト上のお問い合わせフォーム、
または電話（03-6824-5538）にてご連絡ください。

お問い合わせフォーム：<https://www.tenohasi.or.jp/contact/>

＼アパートを募集しています／

路上生活から抜け出してアパートを借りようとしても、生活保護受給者や路上生活経験者、また
障がいのある方々は、不動産業者から契約を拒否されることが少なくありません。悪質な業者に
だまされたり、運よくアパートに入居できても孤独に耐えられず路上に戻ってしまうケースもしばしば
あるのです。そこで TENOHASI では不動産業者を通さず、大家さんと入居者が直接契約で賃借
できる物件を求めています。現在、豊島区・練馬区・板橋区・中野区・北区・文京区
（その他自治体でもご相談ください）内で探しています。現在、この直接契約でお借りしている物件は
現在 9 件です。入居後も定期的な訪問や生活支援、入居者と入居者に関するオーナー様からの
ご相談を行います。まずは担当までご連絡ください。お待ちしております。

お問い合わせ（担当：幸田）

E-mail：housingfirst@tenohasi.or.jp

TEL：03-6824-5538

TENOHASIの活動

- 炊き出し&医療生活相談&鍼灸 毎月第2/第4土曜日 東池袋中央公園
- 衣類配布 毎月第1土曜日 東池袋中央公園
- おにぎり&夜回り 毎週水曜日 池袋駅前公園～池袋駅とその周辺
- ハウジングファースト東京プロジェクト

お問い合わせ

メール：TENOHASI ホームページの「お問い合わせ」から

電話：03-6824-5538（事務局）平日 10:00～17:00

□ HP <https://www.tenohasi.or.jp/>

□ facebook <https://www.facebook.com/tenohasi/>

□ twitter <https://www.twitter.com/tenohasi/>

炊き出し（毎月第2・第4土曜日）ボランティアを募集しています。

炊き出し実施日の13日前の日曜正午から申込フォームより受け付けています。

「できるかも？やってみたい」と思われた方、まずはご応募ください。

一度ご参加いただき、「これなら続けられそう。次回以降もまた参加したい」

と願っていただけることを願っています。詳しくは

「てのはし 炊き出しボランティア」と検索、または以下 URL をご覧ください。

<https://www.tenohasi.or.jp/join-us/>



特定非営利活動法人TENOHASI

会報第45号 2024/5/10発行

発送元

〒171-0043

豊島区要町1-28-20マカロニ

特定非営利活動法人TENOHASI TEL 03-6824-5538

会報誌のweb版をホームページにアップしています。

*個人情報保護のためweb版では「ご寄付御礼」ページは削除しています。

「紙の会報誌は不要」という方は、お手数ですが上の「お問い合わせ」からご連絡ください。

印刷 アビーム（社会福祉法人復生あせび会）